

とりあえず歴史に名を刻みたかったヤツ

はごろも282

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ワノ国の侍すげ〜！おれも自分の国と名前広めたいな〜！！

## 目次

とりあえず歴史に名を刻みたかったヤツ	1
続 とりあえず歴史に名を刻みたかったヤツ	5
あるいは冒険の夜明け	10
続 あるいは冒険の夜明け	14
あるいはこんな世界線（掲示板的）	18

とりあえず歴史に名を刻みたかったヤツ

マキノは激怒した。必ず、かの荒唐無稽の愚か者を殴らねばならぬと決意した。

マキノには男心がわからぬ。マキノは、田舎でもうすぐ15になる村民である。よく遊び、店のお手伝いをして、危険とは縁遠い平和な生活をしてきた。けれども戯言には人一倍に敏感であった。

マキノは才女である。世界で大海賊時代がうんぬんで大騒ぎになつてゐる事も知つていた。とはいへ边境の片田舎に生きるマキノにはそれはいまいち実感の湧かぬことであつた。いつもならそんな話に男心とやらですぐに食いつく件の男の子もまったくの興味を見せずつと昔のワノ国の侍にお熱であつたために、ただでさえ湧かぬ実感はより薄れていった。

それゆえマキノはこれから先も今と変わらぬ暮らしが続き、一つ下の男の子と普通に結婚して子宝に恵まれ、普通の幸せを得て生きていくのだと思つていた。なんなら村の大人たちの姿を見てあんな夫婦になりたいとかあんなことをしてもらいたいなんて考えるくらいにはその生活を夢見ていた。

端的に言えばマキノは男の子を憎からず想つていた。少なくとも『結婚?どうしてもして欲しいなら考えなくもないけど?』とか言つちやえるくらいには。マキノもまだ思春期の少女。普段から温厚で優しいと知られるマキノはその男の子にはツンデレであつた。

故に、マキノは激怒してゐた。村を歩くマキノを見て男たちが引きつったような声を上げているが、今のマキノには関係がなかつた。

怒れるマキノの手にはくしゃくしゃになった紙切れが握られていた。紙切れには一言、こう書かれていた。

《歴史におれの名を刻んでくる》

マキノの想い人は、愚か者であつた。

夜明けより少し前、愚か者ことフルは家を出発し、市場を越え集落を越え、村の端の港までやってきた。フルに両親はいない。いる

のはお節介焼きの小うるさい幼馴染の少女のみだ。この幼馴染は口を開けば小言が飛んでくる妖怪じゅーばこツツキである癖に何故か朝一番から欠かすことなくお宅訪問をする異常者である。

それゆえフルはこの妖怪にバレぬように村を出る必要があった。フルは別に少女を疎ましく思っていない。むしろ逆である。年上で美人の少女が世話を焼いてくれることをフルはいたく喜んでた。周りの男に『自分はこれほど恵まれているのだ羨ましかろう』とマウントをとり煽りカスになる程度には満喫していたのだ。もちろん嫉妬に駆られた男どもにリンチにされたが特に気にしてはいなかった。当時からフルには勝者としての慈愛のころがあった。

けれど、それはそうとしてフルには夢があった。幼いころに聞いた話である。ずっと昔に空飛ぶ竜を斬ったという剣豪がいたと。それゆえか、その剣豪は世界にへワノ国の侍の存在を知らしめたという。

フルはこの話をいたく気に入った。フルには剣の心得など一切ない。剣士の矜持も、義理を重んじるとかもない。彼にはそこら辺はそんなに興味が湧かなかった。けれども世界に自分の存在を轟かせたという一点において、フルは剣豪に強く憧れた。

幼い少年にとつて、有名Ⅱかつこいいだった。聞けば剣豪は放蕩するタイプの根無し草であつたらしい。定職につき決まった時間に起きて働くのが大嫌いなフルはそんなところも気に入っていた。

そんなこんなで剣豪に、というか剣豪の名声に憧れを抱いた幼いフルは体を鍛えることにした。定期的に村に現れる大柄のヒゲに攻撃をしかけたりもしてみた。村の大人たちが海軍だの英雄だのと言っていることは当然知っていたが、フルはとりあえず船Ⅱ海賊、噂に聞く大海賊時代のビッグウェーブに乗った阿呆と認識している体で襲いかかった。幼い少年のヤンチャと扱われる自分の立ち位置を最大限に活かした振る舞いである。フルは昔から小賢しかった。この頃には常習的にマキノにお説教されるようになっていた。

このあとも、興が乗った大男に海軍に勧誘されたりだとかチキチキ山賊追いかけてっこだとかのアクシデントを乗り越えたフルはよう

やく今日、こうして大海原に羽ばたこうとしていた。

もちろん、ふわつとしたノリで今日の出航を決意したことは想像に難くない。けれど、そんなフルも旅するに当たって色々決め事をしていた。

まず一つとして、17を迎える前に一度は戻ってくることに。そしてもう一つが決して海賊にはならないことである。

フルは今年で14になる。17までに戻るといふ決め事をしていゝる以上は既に旅をするにはちようどのタイミングであった。およそ3年。それがフルが一旦考える最長であり、以降は一度村に戻つてから考えるというのがフルのプランである。

当然、この決め事にも明確な理由があった。といつても非常に単純なことだ。幼馴染の少女の存在がゆえである。この幼馴染、口喧しくお節介がすぎるところがあるが善良で明るく美人である。生まれ育ちが街であれば引つ張りだこの人気者間違いなしだ。

フルの一つ上のこの少女は、つまりフルが17のときは18だ。18ともなれば男の一人や二人できていてもおかしくはない。見合の誘いだつてくることもあるだろう。ただでさえ今マキノとの仲の良さを周囲に自慢し尽くしているフルにとって、そんなことは耐えられなかった。

自分の都合で海へと出る愚か者は、本気で『おれが戻るまで、ないしはおれが外で女の子を捕まえられるまでは誰のものにもなつて欲しくないなあ』とか思つていた。この男、無駄に独占欲が高いタイプのクズであった。

当然、海賊にならないのも同様の理由である。海賊は犯罪者、犯罪者となればフーシャ村へ戻れない。わりとそれがメインである。

とはいえ、他にも海軍の大男強すぎ問題とか、そもそも懸賞金とか海賊つて無駄だしダサくね問題、というか犯罪者になるのは人としてどうなの？みたいな理由もあつた。身近にいた大人が善良だつたことと海軍の知り合いがいることもあつて、フルはカスのわりには善人よりの思考であつた。

「よしよし、出航だー」

せっかくの門出が無言ではあんまりだと思ったためにとりあえず  
大声を出さぬよう注意しつつも声に出す。そんな彼の脳内はへワノ国  
の侍に値する良い謳い文句ってなんだろう？で染まっていた。

こうして、フーシヤ村から一人の少年が旅立った。未来の海賊王が  
運命の出会いをする3年ほど前の出来事である。

## 続 とりあえず歴史に名を刻みたかったヤツ

その夜、フルルはようやく故郷に辿り着いた。昔とまるで変わらぬ風景に思わず笑みが溢れる。思い浮かべるのは村の男たち。きつと昔と変わらぬのだろうと、久々の対面に心を躍らせる。

事実、フルルは村についたときから彼らと会うことを楽しみにしていた。こんなしけた村で3年間のうのうと過ごした芋くさい男どもとの再会を。どれほどの田舎っぺに変貌してくれたのだろうか。フルルは心から旅を続けて成長したシティーボーイたる自身との格の違いを見せつけたくてウズウズしていた。

村にいた頃より煽りカスであったフルルだが、旅を終えて煽りにも拍車がかかっていた。時代に取り残された化石人間どもにどんな話をしてやろうか、美人のチャンネルとの出会いかそれとも海を自在に泳ぐ人種の話か。

また、出航したときよりの決め事の目的であったマキノのことも気がかりであった。あの小言を言うためだけに生まれてきたような少女は元気になっているのかはフルルの中でも重要なことである。もしも、万が一のことではあるがこの3年の間にマキノに男なんてできていようものなら。フルルは躊躇いなく男を亡き者にする自信があった。この男、無駄に高い独占欲は未だ健在である。

そんな今後のことを考えつつ、フルルはなんの気無しに過去に自分が使っていた自宅の扉を開いた。

そこにいたのは、少女であった。絶賛お着替え最中の。

ガチャリと開いた扉の方に振り向いた少女と目が合う。互いに硬直すること数秒、先に声を上げたのはフルルであった。

「キ、キヤアアアアアツツ!?!?」

「え、ええ!?!そっちが叫ぶのー!?!」

赤面し身体を隠す少女の声が虚しく響いた。

赤い髪の大きなお友達に殺されかけるといふハプニングを乗り越えて、フルルは一息ついていて。その横にはジト目でフルルを見る少



女とそのまた背後でフルを見る大きなお友達。ジト目、ギリギリジト目なのかもしれない。多くの人はそれを三白眼というし、三白眼はブチギレている人に見られるのだが、そんなことはどうでもいい。

「彼女のお父さんですか？」

フルは柔らかな笑みを浮かべ、至つて落ち着いた声で尋ねた。

「……そうだ」

夢だといいな。フルは心底そう願った。いったいどうして自分の家で懸賞金10億の凶悪犯の娘が着替えているんだろう。直面した現実が理解の範疇を超えすぎていた。

「お前は、何者だ？ここが赤髪海賊団の滞在地と知つての狼藉か？」

男は、ハツキリとそう口にした。知るわけねえだろ、フルは心からそう思った。

「村民はどこに？」

「悲鳴が聞こえてすぐに出てこないよう伝えた。滞在させてもらう身として用心棒くらいはするさ。誰も来ることはない」

「……」

なにしてんだよボケカス。イヤツぶってんじやねエ犯罪者。フルは内心でそんな罵詈雑言を男に浴びせた。

どうしようか必死に考えて、いよいよ脳がパンクするかといったところで、フルは『なぜ自分の家で下手に出る必要があるんだろう』とか考えだした。相手は海賊で犯罪者、どうしてここにいるのかはまるで分からないがその事実はかわりない。なによりここはフルの家である。10に満たないガキの裸見た程度で発情するような年齢でもない。

自身への言われぬ誹謗が何よりも嫌いな自己中であるフルは先程までの焦りを忘れ、それに変わり憤りを覚えはじめた。

そうして、フルは10億にメンチを切った。後先考えずに動くことはフルの得意とするところである。人はこれを短所という。

「おれの家におれが入ってなにが悪いんだ？」

「……ここは空き家だと聞いているが？」

「え、うそ。誰に？」

「村長だ」

「……」

「……」

気まずい沈黙が流れた。知らぬ間に亡き者にされていたフルはもちろんのこと、事情を知らぬ赤髪の男も何かを察したのかスツと目をそらした。

「と、とりあえず酒場についてきて貰えるか？」

「わ、わかった」

完全に信用したわけではないだろうが、男のフルに対する警戒度はガクンと落ちていた。

酒場に向かう道中、名を教えあつたフルたちは談笑に花を咲かせていた。

「へエ、3年前に。いくつだお前？」

「当時は14だったから今は17になるね」

「まあ、それから音信不通なら空き家扱いも仕方ないか」

「それより！レデイの裸を見ておいて何も無いの!？」

「ごめんねウタ。でもどうせならボンキュツボンの子がよかつたかな」

「失礼！シャンクスコイツすつごい失礼!!」

「フル。お前、ウタの身体が貧相だと言うのか？」

「9歳児に貧相とかないと思うよ」

彼らは道中でわりと仲良くなっていた。男改めシャンクスは既にフルを悪人ではないと認識し、フルもまたシャンクスを話の通じる犯罪者であると思っていた。

フルが聞くに、シャンクスら赤髪海賊団はつい最近この村に訪れたらしい。今はここを拠点としつつ村の少年ルフィを筆頭に仲良くなっているのだとか。

フルは話題のルフィという少年にそれほど詳しくなかった。それもそのはずである。フルが村を出たとき、ルフィはまだ3歳になるかどうかといったところであった。

そんな少年ルフィは結構なわんぱく小僧である。ルフィはシャンクスにたいそうなつき、将来は海賊になると言つて憚らないという。フルルはこれを聞いたとき『それほどのヤンチャ坊主は村始まって以来だろう』などと宣い口を大きく開けて笑った。

村始まって以来の愚か者であるフルルは自分を棚に上げるのが誰よりも得意だった。

そうこうするうちに、3人は酒場に到着した。人も少なく発展もない寂れた村であるが、昔と変わらず酒場には確かな活気がある。

「戻ったぞ」

「ただいまー!」

最初にシャンクスが酒場へと入る。その後ろにウタが続き、最後をフルルが歩く。シャンクスに、酒場にいた人から声が返ってくる。

「おお! 結局なんだったんだお頭?」

「ウタが漏らしてたのか?」

「してない!! デリカシーなさすぎ!!」

「ハツハツハ! それよりお頭、後ろのは誰だ?」

「ああ、来客だ。なんでもマキノさんに話があるんだと」

「え、わたし!? いったい誰かしら——」

喧騒の中で進む話にはフルルはついていくことができなかつた。とかく喋らなくても勝手にすすむからと端から口を挟むつもりもなかつた。

そうして話が進みマキノがフルルを認識したことで、ようやくフルルは口を開いた。

「おれの家、空き家になってんだけどなんか知らない?」

直後、横から『ええ……』だとか『マジかお前』だとか聞こえたがフルルは気にしなかつた。デリカシーとか感傷を母親の腹に捨ててきた男である。雰囲気への配慮だとかそういうのは一切なかつた。というか思い至らなかつた。

対して、マキノはフルルの言葉になにか確信を得たようであった。そうして手に持った酒瓶をそのままに、ゆっくりとフルルの方へと歩みを進める。

ゆったりとした足取りはいつしか駆け足となって、フルルの元へたどり着く頃には普通の走りと同色ないほどになる。

周囲からすると、まるで感動の再会である。心なしかマキノの目尻には涙が浮かんでいるようにも見え、フルルも柔らかな表情を浮かべているようだった。

マキノはそのまま踏み込むと、大きく手を広げ――

「連絡も寄越さないで何してたのもう!？」

――手に持つ酒瓶がすっぽぬけ、フルルの顔面に直撃した。

そして、そのまま突進してきたマキノの頭部が鳩尾に突き刺さり、フルルの意識は消し飛んだ。

『……なんで?』

周囲の反応は完全に一致した。

## あるいは冒険の夜明け

旅を終えてフーシャ村に戻ったフルを待ち構えていたのは怖い犯罪集団と幼馴染のクリティカル暴行であった。幸い犯罪集団とは運良くすぐに打ち解けることができたが、問題は幼馴染の方である。フルの書き置きがもとより気にいらなかったマキノは、気を失ったフルが回復するとすぐに滾々とお説教をはじめた。やれ心配したのだの、無言で出ていくのはそもそもが異常だだの、挙句の果てには私のことはどうでもいいのかだのとこれまで積みもった鬱憤をすべて吐き出すかの如く捲し立てたのだ。

これにはさすがのフルも口を閉ざす——なんてことはなく、さも当然のように減らず口で返した。当然そんな様ではマキノの怒りは収まるはずもなく、お説教は長くなった。

そんなことが既に1年ほど前になる。フルは未だにフーシャ村で生活をしていった。

今朝のことだ。何故かフルの家に居着いているマキノの手によって朝イチから酒場に連行されていたフルがカウンターで墮落していると、けたたましい声が響いた。

「おれはケガだつてぜんぜん恐くないんだ!!連れてつてくれよ次の航海!!」

村の子どもルフィである。シャンクス率いる海賊団と仲を深めた少年ルフィは酒場の常連であった。宝払いと称して金を落とさずに食事をするその姿はフルをして海賊の素質ありと言わざるを得なかった。ちなみにフルが幼い頃は隙をみて魚を盗んだりを常習的に行っていたわけだが、そんなことは今のフルには知らぬことである。

「そんなに海に出たきゃフルに頼めばいいじゃないか」

「おれは海賊じゃない」

「フルなんかだめだ!おれはシャンクスの船がいい!!」

「ぶちのめしてやろうかクソガキ」

「二アツハツハ!!」

話を眺めていたら突然話を振られ盛大に罵倒されたフルは怒りから大人げなく格の違いを見せつけようとして、背後から忍び寄る店主に制圧された。

「だめですよ船長さん。フルは海には出ないんです」

「マキノさんか。そういえばそうだったな」

「マキノ重いからどいて」

フルの願いはペシンツ！という平手打ちで返された。

マキノの言葉通り、フルはこの1年海へ出ることはなかった。3年間の罰という名目で遠出の出航を禁じられていたからだ。もちろん、フルはそんな罰なんてものに縛られる男ではない。マキノの男性事情を調査したり、村の男たちに外の思い出をひけらかして悦に浸ったりしてひとしきり故郷を堪能したフルは当たり前のように約束を無視して動こうとした。それに微塵も罪悪感が湧かぬからこそ、フルはクソ野郎なのだ。

けれども、フルのその思惑は頓挫した。当然マキノが原因である。幼馴染であり村で最もフルを知るこの少女はフルの行動を予測しているかのように立ち回った。その様は村の男たちに『鬼が本格的に囲いに行っている』と称されたりした。3年前に紙切れを持って怒り狂っていたマキノを知る男たちだからこそその発言であった。

そうして最終的にフルは『また置いていくの？』という台詞に加えて泣き顔というマキノ式必殺最強コンボに陥落した。邪険に扱うことは多々あれど、フルは泣き顔が見たいわけではない。むしろマキノに男がいるかどうかのために帰ってくるくらいには昔から好意的だ。それはそうとして有名になりたいだけである。つまるところそれを把握しているマキノの完全勝利であった。

そんなこんなでフルは今に至るまで村に居着いていた。ぶつちやけフルは甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるマキノとの同居をいたく気に入っていた。朝から叩き起こされたり小言を言われるのは多少面倒ではあるがそんなことはフルにとっては今更なことなのだ。村にいた頃よりその程度のごとは日常であった為だ。

ちなみに、マキノが同居している理由は3年前のことが原因だった

りする。昔から朝イチにお宅訪問をしていた少女マキノ。けれど彼女は愚か者の出航を止めることができなかつた。これを重く捉えたマキノは絶対に逃さない方法を考え、その結果が同居だった。

もちろんフルルはそんなこと知る由もなく、なんならわりと最初の方から『あ、ここ住むの？ふーん』くらいのノリで受け入れていた。この男、意外と流されやすかつたりするのだ。

以降もシャンクスたちとルフィのじゃれあいが続く。フルルがそれを眺めていると、そこに新たな来客がやってくる。山賊である。フルルが『いかにも悪そうな髭面だなあ』なんて考えている間に山賊は海賊を嘲ってマキノに酒を要求した。流れるような挙動であった。「お酒は今ちょうど切らしてるんです」

「んん？おかしな話だ。海賊どもがなにか飲んでるようだが、ありや水か？」

随分理性的な賊だ、フルルはそう思った。もしもフルルが山賊の立場であれば酒が出せぬ時点で一人二人殺しているだろう。フルルは賊よりも賊らしかつた。

その後、謝罪の意味で酒瓶を手渡したシャンクスに山賊がブチギレた。やはり賊は賊、山賊は酒瓶を思い切りシャンクスの頭目掛けて振り抜き、瓶は粉々になつて散つた。

この時、フルルは瓶の破片がマキノに当たらぬように壁となつていた。ちやうど近くにいたからこそその行為ではあるが、咄嗟に動ける程度にはフルルはそこそこできる男であった。それに気がついたマキノはこんな状況にも関わらずちよつと胸がキュンキュンした。

「おい貴様、舐めたマネするんじゃないやねえ」

怒れる山賊は言葉を続ける。その話によれば山賊はシャンクスのような男を56人殺したお尋ね者であるらしい。

それはすごい。フルルは素直にそう思った。フルルの知る限りではシャンクスは10億を優に超える大物賞金首である。つまりこの山賊は懸賞金560億の男ということになる。最強だ。800万はお遊びでダミーのようなものだろう。冷静に考えて自分の手配書を自分で持っていることなどありはしないのだから。

「悪かったなアマキノさん。ぞうきんあるか？」

「あ……いえ。それはフールがやりますから」

「??？」

マキノはなんの迷いもなくフールに雑用を押し付けた。流れるようなその言葉にフールは一瞬の間言語が理解できなかつた。その隙に山賊は酒場をさらに荒らし、倒れるシャンクスに嘲りを向けて帰っていった。

あとに残るのは、びしゃびしゃになった床とそこかしこに飛び散る瓶の残骸のみである。

フールは山賊が嫌いになった。



## 続 あるいは冒険の夜明け

山賊の来訪から少し後のことである。何故か清掃をすることになり納得がいかない中ぞうきんで床を拭いていたフルルは人の腕が伸びる様を目の当たりにした。

はちやめちやに動揺しているシャンクス達の話によると、ルフィはどうかやらゴムゴムの実と呼ばれる悪魔の実を食べてしまったらしい。

3年間海に出ていたため当然ながら悪魔の実の存在を知っていたフルルではあるが、実際にゴム人間を見たことなどなかった為に興味津々であった。

悪魔の実、それは海の秘宝とも呼ばれるお宝。食べた者は特殊な能力を身につけることができるかわりに海に嫌われ一生泳ぐことができなくなるとかどうとか。泳げなくなるのに海の秘宝なのは どうしてなのか、フルルは当時からずっと疑問に思っていたりする。

旅の途中で何度か能力者に出くわすこともあり悪魔の実の希少性や有用性は理解しているフルルではあるが、知らぬ間に能力者になったルフィを羨んだりすることはない。一人旅をすることが多かったフルルにとって泳げないのは致命傷であるからだ。その意味ではフルルはルフィに同情さえしていた。

それから数日後、村を離れていたフルルが戻るとシャンクスの腕がなくなっていた。マキノに聞けばフルルのおらぬ間に村に件の山賊が訪れていたらしい。山賊はルフィに乱暴を働き色々あつて海賊に壊滅させられ、すったもんだの末シャンクスの腕は近海の主に千切られたそうなの。目を離れた隙に話が進み過ぎだろう、フルルは純粹にそう思った。

マキノから『肝心なときにいないんだから！』という至極真つ当な指摘を頂戴したフルルは、けれども山賊の壊滅にいささか肩透かしを食らったような気持ちになっていた。

フルルが村を離れていた理由は簡単で、調子づいた山賊を分からせる為であった。

酒場での行動は山賊たちに一種の成功体験のような余韻を与えているだろう、フールはそう考えていた。そのような経験から何度も村に来られるようで少々煩わしいと思ったフールは単身山賊のもとへ赴き『あんまり来ないでね』とお願いするつもりであった。幼いころに山賊と追いかけてつこをしていたこともあるフールは山賊に恐怖とかはなかった。

もちろん、山賊が聞き入れないようであれば手を出す準備はできていた。後始末をさせられたことに対する腹いせの一面もあつたりするため、フールは手を出すことになんの躊躇いもなかった。この男、他人が何をしようとあんまり気にしないがそれが自身に被害が及ぶとなれば途端に動くようなヤツであった。

「おお、フールか。どこ行つてたんだ？」

「山へ芝刈りみたいないな感じ。なんか色々あつたらしいね」

騒動後、フールと海賊団の会話である。彼らのノリは変わらず緩かった。

「腕千切れたんだってね」

「まアな。だが安いもんさ」

「赤髪のシャンクス改め隻腕のシャンクスじゃん」

「おいおい、お頭に変な二つ名をつけないでくれ」

「アリだな……」

「無しだよ落ち着けお頭」

「ちなみにおれも流浪の風車マンってあだ名があつてね」

「ダセエ二つ名——聞いたことあるなソレ？」

なんとも軽妙に話は進む。1年あまりの時間で海賊団とフールはいい感じに仲良くなつていた。

「おれ達は直にここを立つ。長らく世話になつたな」

「ルフィたちには伝えたのか？」

「すぐ伝えるさ」

どうやらシャンクスたちはここを離れるらしい。しばらくは出航の準備でバタつくことになるだろう、フールはそう考えて、あることを思いついた。

「この船出でもうこの町へは帰ってこないって本当!？」

ルフィの声がこだました。シャンクスたち赤髪海賊団は今回の船出でフリーシャ村から立とうとしていた。

「ああ。寂しいだろ」

「うん、まあ悲しいけどね。もう連れてけなんて言わねえよ！自分でなることにしたんだ海賊には」

「どうせ連れてってやんねーよ」

ルフィとシャンクスの会話は続く。

「お前なんか海賊になれるか!!」

「なる!!」

笑いながら指摘したシャンクスに対して、ルフィは強い口調で返した。

「おれはいつかこの一味にも負けない仲間を集めて!!世界一の財宝みつけて!!海賊王になってやる!!!」

それは幼い少年の強い決意表明であった。そんな彼の言葉をシャンクスたちは面白いものを見るような顔をして眺めていた。

「ほう……い……おれ達を超えるのか。じゃあ……この帽子をお前に預ける」

動いたのはシャンクスであった。シャンクスは、自分の被る麦わら帽子をルフィに託した。

「おれの大切な帽子だ。いつかきつと返しに来い。立派な海賊になってな」

シャンクスから少年への確かな激励であった。ルフィははじめて、託されることの重みを知った。

そうして、シャンクスは船の方角へと向かっていく。その内心は良い別れができた満足で包まれていた。けれども、そう都合よく話は終わらないのが現実である。シャンクスの歩みを止めたのは、ある一報であった。

「お頭！船の中にへんな書置きが!!」

「ん？なんだ。見せてみる」

シャンクスは船員から紙を受け取ると、流れるようにソレを開封していった。黙っていく末を眺めていたマキノは、ここにきて猛烈に嫌な予感がした。

書置きには、ハッキリとこう書かれていた。

《ごめん、資材借りるねありがとう。マキノには風がおれを呼んでいと伝えておいてほしい》

愚か者は、海賊団の出航というドタバタに乗じて人知れず飛び去っていた。よその船の資材をパクったうえで。とんだクソ野郎であった。

マキノは激怒した。

あるいはこんな世界線（掲示板的）

1：名無しの海賊団  
終身名誉観光大使

2：名無しの海賊団

《歴史におれの名を刻んでくる》

刻んできたものはいったい何なんですか……？

3：名無しの海賊団

フーシャ村に風車あり!!

4：名無しの海賊団

バグだろこれももう

5：名無しの海賊団

そもそも情報が少なすぎる

6：名無しの海賊団

今どこまでわかってるんだっけ？

7：名無しの海賊団

フーシャ村奥義だつて残してきてるだろ！

8：名無しの海賊団

フーシャ村奥義誰も知らないんだよなあ…

9：名無しの海賊団

1（二）リヴァースマウンテンを登山しようとする

2（遊）14歳で一人で海に出航する

3（一）ひとりでシャボンディ諸島までは行っている

- 4 (右) 観光大使
- 5 (三) 七武海勧誘に一武海ならと返答
- 6 (中) 海賊ではない
- 7 (左) 幼馴染がマキノ
- 8 (捕) 本編にまるで介入してこない
- 9 (投) マリージョア襲撃事件に関わっている疑惑がある
- 10 : 名無しの海賊団  
    >>9 有能
- 11 : 名無しの海賊団  
    >>9 サンガツ  
    にしても2・7しか理解できんな
- 12 : 名無しの海賊団  
    扉絵にすらちゃんと描かれない男
- 13 : 名無しの海賊団  
    この海で最も自由な男
- 14 : 名無しの海賊団  
    >>13 これほんとすき
- 15 : 名無しの海賊団  
    実際懸賞金なしのソロで転々としての自由すぎる
- 16 : 名無しの海賊団  
    ミホークとコイツくらいだろそんなやつ
- 17 : 名無しの海賊団  
    自由な男論争で一回は名前出るからな

18：名無しの海賊団

なんで海賊じゃないやつが出るんだよ

19：名無しの海賊団

というか目的はなんなのこの人…？

20：名無しの海賊団

そりや地元PRよ

21：名無しの海賊団

草

22：名無しの海賊団

実際そうなんだよなあ

23：名無しの海賊団

歴史に名を刻むためだぞ

24：名無しの海賊団

フーシヤ村のこと刻んでるんですがそれは

25：名無しの海賊団

ワノ国の侍リスペクトだからしかたない

26：名無しの海賊団

>>>25 これ出てきたとき爆笑した

27：名無しの海賊団

マキノさんはこんなの幼馴染で大変そう

28：名無しの海賊団

??? 「ルフィほど破天荒な男はフーシャ村はじまって以来だろうか  
!!」

29：名無しの海賊団

お前が言うな案件すぎる

30：名無しの海賊団

お、お前ほどの男がそういうなら…

31：名無しの海賊団

>>>30 乗るなエース！

32：名無しの海賊団

そもそもマキノさんは作中トップのフルガチ勢だぞ

33：名無しの海賊団

ガチ勢（対抗がない）

34：名無しの海賊団

風車のお兄ちゃんは好かれてるだろ!!

35：名無しの海賊団

好かれてる（5〜8歳）

36：名無しの海賊団

実際描写少ないからそこら辺は怪しい

37：名無しの海賊団

というかマキノの夫はフルなの？



38：名無しの海賊団

お前は結論を急ぎすぎる

39：名無しの海賊団

その説明をする前に、今の銀河の状況を理解する必要がある

40：名無しの海賊団

流れるような語録

41：名無しの海賊団

もう、散体しろ！

42：名無しの海賊団

>>>37 その場合2年間の間に一度村に戻ってその後また旅立ってることになる

43：名無しの海賊団

フルルはもう旅になんて出ませんよ

44：名無しの海賊団

3度目の挑戦はもう理由すらなさそう

45：名無しの海賊団

>>>43 おはマキノ

46：名無しの海賊団

>>>9 てか9番なにこれ、なに？

47：名無しの海賊団

これはウルージさん粹

48：名無しの海賊団

おつとウルージさんを軽んじたな？法廷で会おう

49：名無しの海賊団

判決！死刑！！

50：名無しの海賊団

ガバガバ裁判が過ぎる

51：名無しの海賊団

！?  
シャンクスの正体はウルージ!?実はイム様とも会ったことがある

52：名無しの海賊団

NAVERでもやらないクソ文面

53：名無しの海賊団

フルの代わりになる海賊は今のところないようです……。フルの今後の活躍が期待されますね！

54：名無しの海賊団

>>52 NAVERなつすぎて草

55：名無しの海賊団

>>53 コレいつも思うけどなにも調べてないよな

56：名無しの海賊団

>>52 アラバスタで時とまってそう

57：名無しの海賊団

>>52 おじいさん、NAVERはどうに閉鎖したでしょう？

58：名無しの海賊団

>>56 知恵袋程度には役立つよ

59：名無しの海賊団

つまり無価値じゃねーか

60：名無しの海賊団

ワノクニの侍に憧れる↑分かる

真似して歴史に名を刻みたい↑まあ分かる

行く先々で人助けする↑分かる

出向いた街にカザグルマを押し付ける↑ギリ分かる？

フーシャ村に風車あり！↑まるで分からない

61：名無しの海賊団

最後の転換本当に意味分からなくて笑う

62：名無しの海賊団

風車押し付けるのも正直謎だよ

63：名無しの海賊団

改めて見るとすごいアクティブな普通の子供だなあ

64：名無しの海賊団

ふつう…？

65：名無しの海賊団

おそらく少ししたら正気に戻りますからね

66：名無しの海賊団

風車はほら、おれが助けましたよ、的なるアピールだよ多分

67：名無しの海賊団

フルはワノクニに侍ありと響かせたリユーマに憧れてる。同じように名を轟かせようとしてるならワノクニに対応するのがフーシャ村になる。ここでフルが侍つてのはワノクニの象徴的な名詞って解釈したとすると、フーシャ村の象徴ってなんだろうって思考に至る。そうしてフーシャ村の象徴といえば風車だよねってなったとしたらフーシャ村に風車ありは筋が通っている。

68：名無しの海賊団

てか人助けできるくらいフルって強いん？戦闘描写あったっけ

69：名無しの海賊団

よく勉強したな：まるで愚か博士だ

70：名無しの海賊団

なんで考察班がいるんだよあんなのに

71：名無しの海賊団

愚かな脳内を考察するものもまた愚か…？

72：名無しの海賊団

愚かをのぞくとき、愚かもまた愚かなのだ

73：名無しの海賊団

>>>69 調べたさ：フルの話題でマウントをとる為にな

74：名無しの海賊団

でもただの愚か博士じゃああのフルは語りきれないよ！

75：名無しの海賊団

どうしてそんなピンポイントなマウントを取ろうと思ったんだ(困惑)

76:名無しの海賊団

>>73 これは愚か博士の器

77:名無しの海賊団

>>38 >>39 >>41 >>69 >>73 >>74

さつきから他所の語録使いすぎなんだよなあ

78:名無しの海賊団

一応だけどここワンピ板だからね

79:名無しの海賊団

ぶつちやけあまりにも使いやすいのが悪い

80:名無しの海賊団

愚かラップもあるから実質フルはナルトキャラまである

81:名無しの海賊団

>>77 何いってんだお前エ!!同じジャンプの……仲間だろ!!!

82:名無しの海賊団

>>78 うるせえ!!お前がそんなこと決めんな!!!

83:名無しの海賊団

>>81 >>82 急にとってつけるな

84:名無しの海賊団

ワンピ語録なら何でもいいわけじゃないんだよなあ

85：名無しの海賊団

>>47 というかウルージさん枠だとしてもどういう流れで噂されだしたのか教えてくれよ。ヒグマですら一応は結果を出してるからな

86：名無しの海賊団

ウルージさんとヒグマを同列に扱ったな貴様！

87：名無しの海賊団

そーいやワイも詳細は知らんわ

88：名無しの海賊団

どつかの二次創作じゃね？少なくともストーリー中にそんな描写なかったと思う

89：名無しの海賊団

ヒグマは10億のシャンクスを56人殺した560億の男だぞ。ウルージさん的には逆に光栄まである

90：名無しの海賊団

>>89 つまり1. 4煉獄ってどこか

91：名無しの海賊団

語弊がありすぎる

92：名無しの海賊団

情報があやふやすぎて二次創作扱いになってて草。一応798話の扉絵が発端

93：名無しの海賊団

798話の扉絵ってなんだっけ？おい>>92詳細書いていいぞ

94：名無しの海賊団  
草

95：名無しの海賊団  
まごうことなきワンピースの王

96：名無しの海賊団  
自分で調べようとする王の鏡。ルフィにぶん殴られてそう

97：名無しの海賊団  
>>>93 くたばれ  
ハンコックとかが写ってる多分自室？みたいなのこの扉絵。右端  
に風車が見切れてるからソレが発端

98：名無しの海賊団  
ブチギレながらも教えてくれる優しさ。誇らしいね

99：名無しの海賊団  
調べたけどマジやん  
風車って助けたときに強制的に押し付けられる呪いのアイテムだ  
からこの風車にフルが関係するならワンチャンやな

100：名無しの海賊団  
呪いのアイテムで草。渡された後どうするかは自由だからセーフ  
でしょ。だよな？

101：名無しの海賊団  
なお、助けられた側は恩的に捨てづらい模様。多分そこまで考えた  
うえで渡してる

102：名無しの海賊団

でも、でもよお！仮に風車がそうだとしてもマリージョアとは結び付けねえだろ!?

103：名無しの海賊団

>>101 アイツならやるで解釈一致してるの悪いけど笑うわ

104：名無しの海賊団

確かにまるで別の案件の可能性もあるよな

105：名無しの海賊団

逆に聞くけどマリージョア以外でハンコックと関わってかつ助けられる展開ってなんだよ

106：名無しの海賊団

それはそうなの

107：名無しの海賊団

>>105 奴隷解放時に海賊でもない一般旅人が混ざってても風車渡して回ってたってこと？遊びじゃねえんだぞ

108：名無しの海賊団

当然の指摘で草。まあでもそんなやべーこと海賊にはならない縛りのフルがやるわけないんだよね

109：名無しの海賊団

村に帰りづらくなるからな

110：名無しの海賊団

ぶっ飛んでる頭なのにどうしてそこへの常識はあるんだよ



111：名無しの海賊団

俺はフールが奴隷解放に進んで参戦したわけじゃないと思う。ただマリージョアの中が気になってこっさり侵入したタイミングで事が起きて流れて巻き込まれただけとかあるよきつと。

フールならやりかねないしやってくれると俺は信じてるんだ

112：名無しの海賊団

愚か博士：!!

113：名無しの海賊団

そんなバカな、とは言い切れないラインなのホントに意味わかんない

114：名無しの海賊団

俺たちはなにも語られないフールに過剰な期待を抱いている。抱かされている

115：名無しの海賊団

シャンクスだって数十年近く『失せろ!』で戦ってきたんだ。同じ1話登場のフールにだってできらあ!

116：名無しの海賊団

フールに関しては『格』の描写すらないんですが

117：名無しの海賊団

14歳で一人海に出て平気な時点である程度は確保されてるだろ

118：名無しの海賊団

なんならRED連動エピソードでしれっと娘の裸覗かれてキレてるシャンクにヘラヘラしてたぞ。あれ絶対覇気出てたろ

119：名無しの海賊団

何いってんだそんなのヒグマさんでもできるわ

120：名無しの海賊団

流石に最初は足震えてたけどな。会話の流れでどんどんヒートアップしてって最終的に自分からメンチ切り出して笑ったわ。

なんにせよあれでまた変な考察盛り上がっちゃったのは確か

121：名無しの海賊団

そんな得体の知れないヤツを手足の如く扱うマキノさんよ

122：名無しの海賊団

悪かったなアマキノさん。ぞうきんあるか？

あ……いえ。それはフルがやりますから

123：名無しの海賊団

ホントに流れるような押しつけ方で笑う。いつもやってないところの速さにはならない。ソースはうちの母親

124：名無しの海賊団

マキノさんなら私がやりますから……って言ってもおかしくないのね。それだけの関係値なんだね

125：名無しの海賊団

フルにとってマキノさんはルフィにとってのナミ梓なんですよ  
(適当)

126：名無しの海賊団

愛ある拳粋か

127：名無しの海賊団

愛ある酒瓶砕だぞ

128：名無しの海賊団

>>9 120レスあってまだ半分くらいしか語られないのか…

129：名無しの海賊団

ほとんど大嘘の可能性の方が高いし、結局のところ語ることがないように見えて実は多いようでやっぱり（出番的に）ない男